

実践6

高等学校における地域をフィールドとした実践的マーケティング活動の展開

—E S Dの視点で見直したミツバチプロジェクトの取組—

愛知県立愛知商業高等学校 梶原英彦

1 はじめに

本校は、大正8年創立の県立高校で、創立93年を迎える商業高校である。校訓に「文武両道」を掲げ、専門高校として生徒の自立する心や、創造力、主体性を育み、実社会で活躍できる実践力、専門性のある職業人を育てることを目標としている。学習への熱意を通し、地域社会の活性化のために貢献できるような人材の育成も目標としている。また、クラブ活動を通して人間性を育成するため、技術を高めることだけに終始せず、礼儀や挨拶をはじめ人間としての心のもち方や姿勢を指導することにも重きを置いている。

商業専門高校としての責任を負う本校では、学校独自の工夫されたカリキュラムをもっている。生徒の進路を実現させるため、四つのコースを設定し、生徒は自分の興味や必要性から幾つかの教科・科目を選択できるようになっている。さらに、本校では生徒に対し、さまざまな技術・仕事に必要な資格を取得するための手助けを行っている。これらの資格を取得することで、生徒は就職や大学進学の際に生かすことができている。

また本校の特色の一つである総合的な学習の時間の代替科目「課題研究」では、さまざまな講座が開設されている。本研究では、商業教育における「課題研究」を一層充実させることにより、自ら考え、自ら行動し、自ら解決していく態度と考え方を涵養することを目的として、上記の研究テーマを設定し、E S Dの考え方、視点で見直す取組を実践することにした。

2 研究の目的

本校では、学習指導要領における商業科の教育内容である地域等の諸問題を発見する探究力・論理的思考力・表現力を育成するために、科目「課題研究」の選択講座として「マーケティング研究」を開講し、大学や企業等と連携し、地域に根ざした実践を展開してきた。これまでの活動を振り返ってみるとE S Dの活動と重なる部分も多い。E S Dは、子どもたちが直面している「環境」「経済」「社会」に関わるさまざまな課題に向き合い、先人の知恵を学びながら、互いに協力し合って取り組んでいく協働プロセスである。E S Dは、地域に暮らすさまざまな立場の人々によって、地域をはじめあらゆる場面で展開されるものであり、総合的に学び、実践することが大切である。本講座では、「環境」「経済」「社会」といった多面的な視点から問題を追究し、その問題に対して自ら学び、考え、具体的な行動を実践する商業を学ぶ生徒を育て、さらにはさまざまな主体との協力によって、「環境」「経済」「社会」のバランスがとれた持続可能な社会の構築に貢献できる生徒を育成することを目指して、本研究をスタートさせた (p. 89図1)。



学校（正門より）



活動風景（養蜂）

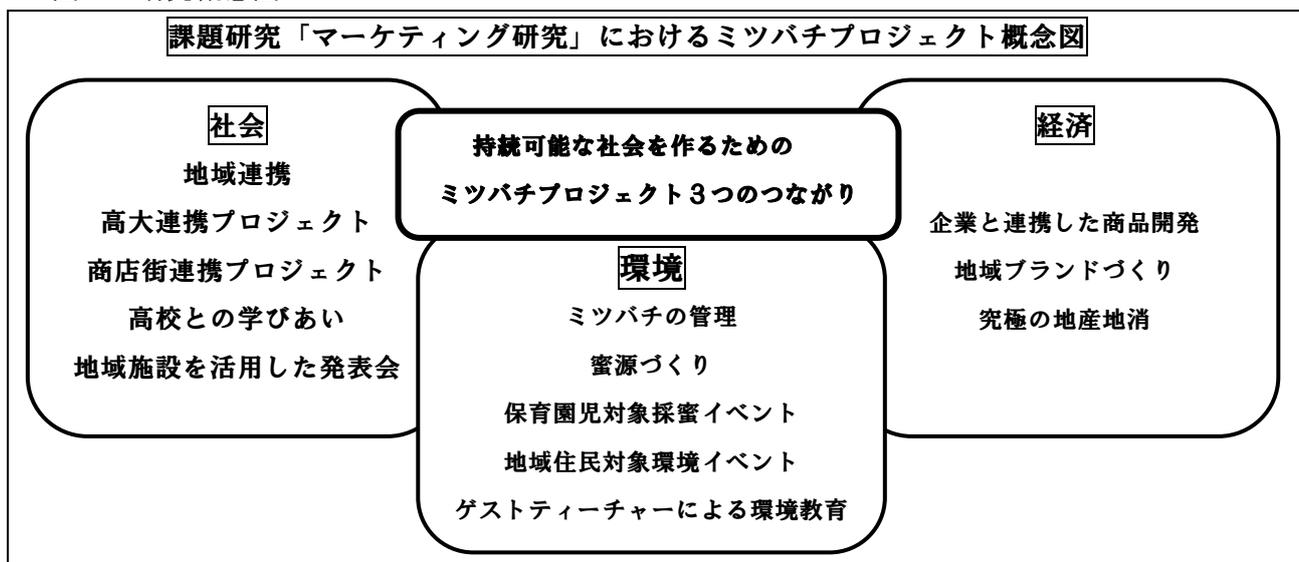
【参考】E S D (Education for Sustainable Development) とは、「持続可能な発展のための教育」の英語訳で、持続可能な社会可能な社会づくりのための、あらゆるレベルの教育や相互の学び合いを意味する。

自然環境，経済環境，社会環境の調和のとれた発展のために必要な知恵や考え方を，人々が互いに学び育むこと，それが，「持続可能な発展のための教育（E S D）」である。

※環境＝自然・経済・社会

(中部E S D拠点がめざす持続可能な地域づくり「中部E S D拠点のアクションプラン」より)

図1 研究概念図



3 研究の方法

(1) チェックシートによる分析

本講座の取組であるミツバチプロジェクトを「環境」「経済」「社会」をチェックシートに当てはめて分析する。さらに，E S Dへのアプローチを明確にするため，追加できる視点をチェックシート（国立教育政策研究所の提示したもの）に加える（表1）。

表1 実践と内容・方法との関係

環：環境 経：経済 社：社会

方法（技能） 内容（概念）	①批判的思考	②システム思考	③未来志向思考	④問題対処のスキル	⑤行動のスキル	⑥コミュニケーションのスキル
I 人間の尊厳		○社			○社	○社
II 将来世代への責任			●社	●社	●社	○社
III 自然との共存	●環	○環	○環	○社	○環	○環
IV 経済的社会的公正	○経	●経				●社
V 文化の多様性の尊重					○社	○社

○は従来からの視点，●は改善点として加えられた視点

E S Dカレンダーとチェックシートによる分析に沿って，各実践を行った。体験活動だけの学習にならないように，E S Dの視点を明確にする。

(2) ESDの視点で見直した課題研究「マーケティング研究」のカリキュラム(ESDカレンダー)づくり

課題研究「マーケティング研究」を中心に、教科商業との関連を意識しながら年間計画を立て、それぞれの学習活動に年間計画を位置付ける(表2)。

- ① これまでの課題研究「マーケティング研究」におけるミツバチプロジェクトの活動を「環境」「経済」「社会」の3つの視点で整理する。
- ② それぞれの活動に関わるESDの視点を、ESDカレンダーに記載する。
- ③ ESDの視点で見直し、よりESDの方向性と合致するように学習活動を改善する。

表2 ESDの視点を入れた年間計画

ESDの視点	環境	経済	社会	
4月	ミツバチの世話、採蜜作業 飼育活動・体験的活動 校内に花を植えて、ミツバチの蜜源づくりとなる「ミツバチ花壇づくり」 栽培活動・体験的活動・主体的思考	徳川園内にあるレストラン・カフェへの蜂蜜販売・商品化 主体的活動・体験的活動 採れた蜂蜜のブランド化を目指し、ゲストティーチャー(日本弁理士会東海支部)の継続的な支援をうけ、知的財産教育を実践 主体的活動・体験的活動	ガイドボランティアによる文化のみち街歩き体験 地域連携	名古屋学院大学地域連携センター主催「ミツバチ学習会」参加 地域連携・多様な立場の人との学び合い
5月	ビオトープづくり 体験的活動		地域住民連絡協議会、東区役所などへのプレゼンテーション実施 体験的活動・地域連携	
6月	保育園児を対象として採蜜イベント実施 体験的活動・主体的思考		ミツバチ高大連携・名院大生よりオリジナルパンの商品化講座受講 主体的活動・地域連携	
7月	大学生と連携した環境イベント実施(徳川園) 体験的活動・主体的な思考	企業と連携した蜂蜜を活用した商品開発 体験的活動・主体的な思考や行動		
9月	大学生と連携した環境イベント実施(白鳥庭園) 体験的活動・主体的な思考や行動		・東区ガイドボランティア報告会に参加・発表 多様な立場の人と学ぶ	・東日本大震災支援バザーへの出店 地域連携 ・名古屋陶磁器会館において取組内容を展示・発表 人・施設のつながり
10月	ゲストティーチャーによる環境教育			
11月	自然環境教育		・銀座ミツバチプロジェクトでの発表・交流 多様な立場の人と学び合い	
12月				
1月				
2月				
3月	課題研究発表会			

4 研究の内容

(1) 目指す生徒像とミツバチプロジェクトの概説

目指す生徒像を以下のように設定した。

- ・自立した社会人・職業人として、地域への愛情と誇りをもって、地域の発展に積極的に貢献できる生徒。
- ・環境に関する知識とそれを守り育てる技術を身に付け、自然との共生を図ろうとする生徒。

持続可能な社会にしていくためには、経済・環境・社会のバランスがとれていないといけない。これらの学びがESD、持続可能な社会をつくるための学びになっていると考えられる。以下、活動を通して環境、社会、経済の3つの視点に照らし合わせながら考察していく。

本校（名古屋市東区徳川）周辺には、「白壁・主税・榎木町並み保存地区」を中心に、西は名古屋城付近から東は尾張徳川家ゆかりの庭園「徳川園」まで江戸時代から明治、大正へと続く名古屋の近代化の歩みを伝える貴重な歴史的建造物が多く残されており、このエリアは「文化のみち」と名付けられている。平成23年度からは、名古屋の中でもより自分たちのキャンパスに近い地域で活動を展開していこうと考え、名古屋のモノづくりの歴史や伝統を知ることができる「文化のみち」に着目し、調査を実施した。調査結果からブレインストーミングを重ねた結果、生徒たちの間ではいくつかのキーワードがあがったが、その中でも市街地での養蜂を通じて生態系向上やハチミツを使った商品開発などで地域活性化を目指す「都市養蜂」に最も興味を示す生徒が多数いた。本講座では、まちづくりへの貢献を目的として「なごや文化のみちミツバチプロジェクト」を立ち上げ、校舎の屋上でミツバチ育成の実証実験を開始した。

これまでの課題研究「マーケティング研究」におけるミツバチプロジェクトの活動を「環境」「経済」「社会」の3つの視点で整理してみる。



名古屋2大庭園はちみつ対決

(2) 環境的側面からみたミツバチプロジェクト

受粉を行うミツバチの存在は、生物多様性や環境問題の観点から、非常に重要な問題と認識されつつある。ミツバチの生態やハチミツの効用などの学習を通して、自然や生態系への理解を深めようと飼育下でしか分からないミツバチの生態を観察してもらい、生き物を通して生態系や地域の環境について感じてもらうきっかけにしておこうと未就学児を対象とした環境教育「ミツバチ観察会&採蜜体験」を数回実施している。この活動では、巣枠観察・ミツバチクイズ・遠心分離機体験などを通して、飼育下でしか分からないミツバチの生態を観察しており、地域の環境について考えるきっかけとなっている。また、近隣の住民を招き、本校近くにある尾張徳川家ゆかりの庭園「徳川園」で「ミツバチがつなぐ名古屋2大庭園（徳川園・白鳥庭園）はちみつ対決」イベントを開催、この企画は「なごや文化のみちミツバチプロジェクト」チームと名古屋学院大学「みつばちプロジェクト」チームが合同で行い、徳川園と白鳥庭園のハチミツの味比べを通して、来園者の方々に楽しみながら、環境問題や生物多様性を感じてもらうことをねらいとして実施した。イベント後には「蜂蜜を通して、環境や地域経済のことを総合的に考えていて頼もしい」「この地方の自然と活性化のために頑張っていて欲しい」などのコメントもいただき、大変好評を得ることができた。

このような環境コミュニケーションは、ミツバチと共生するまちづくりを、蜂蜜や受粉といった生態系サービスの観点から改めて認識するよい機会となっている。各イベントにおけるアンケート調査によると、この取組をきっかけとして自然環境への意識が高まったなどの回答があり、生物多様性の啓発活動としても成果が上がっている。



校舎屋上での作業の様子



保育園児対象ミツバチ観察会



ゲストティーチャーによる環境教育

(3) 経済的側面からみたミツバチプロジェクト

ミツバチから、蜂蜜という恩恵・サービスをもたらっていて、それを使って商品化するというマーケティング活動の展開について考えたい。

ア 究極の地産地消

文化のみちで採れた蜂蜜は、文化のみちでしか味わえない、まさに究極の地産地消である。そこで、採れた蜂蜜をこの地域独自の新たなブランドにしようと考えた。そしてその名称を、学校の所在地が東区徳川であることと「文化のみち」に数多く点在する歴史的建造物が尾張藩徳川家との関わりが深いことから、この活動を通じて多くの人に尾張徳川家の歴史についても知ってもらいたいという思いも込めて、「徳川はちみつ」と名付けた。

ミツバチの主な蜜源とみられている徳川園では、素敵な景色とともに、蜂蜜の味覚も楽しんでもらおうと、園内のレストランやカフェにおいて、本校の「徳川はちみつ」を使用した様々な料理を提供していただいた。メニューには生徒の取組内容が記載されており、お客様からは大変好評を得ることができた。その他、文化のみちエリアにある洋菓子店などにも「徳川はちみつ」を提供し、数多くの「Made in 徳川」の商品化が実現した。生徒のアイデアを取り入れた商品開発のほか、店頭には生徒が作成したPOP広告を置かせていただくなど販売促進活動の体験学習も併せて行った。

調査の結果、蜂蜜を提供する店舗では売上の増加はあまり見られなかったが、来店するお客様とのコミュニケーションについては「今まで以上に増加した」と答えた店舗がほとんどであった。この他にも、「地域でとれた蜂蜜を使うことで新規のお客様が増えた」「常連のお客様とも、蜂蜜を通じて会話が弾むようになった」などのうれしいコメントも各店舗から数多くいただいた。また、「蜂蜜を使った新たな商品を開発している」「学生が蜂蜜を届けに来てくれるのが待ち遠しい」といったように、蜂蜜を使った商品開発・品揃えに対する意欲への貢献度も向上したという声も多かった。これは、蜂蜜を用いた「食ビジネス」が地域のコミュニケーションツールとして、また、店舗の新商品開発や品揃えに対する意欲向上のきっかけとして活用されたという証明であり、まちづくりを目指すこれからの活動に生徒は自信をもつことができた。

イ 企業と連携した持続可能な商品開発

名古屋名物である「ういろう」を若い世代にも親しまれるスイーツにしようと、株式会社電通中部

支社の指導と名古屋の老舗和菓子メーカー青柳総本家の全面協力を得て、「徳川はちみつ」とサツマイモを使った「若者に好まれるういろう研究プロジェクト」を実践した。このプロジェクトは工場での学習会、市場分析、アンケート項目作成・調査実施・集計データの活用法、グループワークを通して商品コンセプトや商品イメージづくり・パッケージデザイン案・ネーミング案の検討、試食会実施、メーカーへの最終プレゼンテーションといった商品開発の一連の流れを実践的に学ぶ取組である。

これらの活動を通して、常に生徒に意識させていることは、高校生であるという甘えは捨てることと、社会的な責任をチームで負わせ、計画的にプロジェクトを実行させることである。高校生が地域や企業と関わりながら取り組むこの活動では、計画通りに行かなかったり、チームとして機能しなかったりと失敗することも多々ある。こうした経験を積み重ねることによって、少しずつであるが失敗を恐れないというメンタル面でたくましさも感じられるようになってきた。また、生徒に対して行ったアンケート結果からも「責任感が生まれた」、「地域に貢献できた」「地域の方々に認められた」という実感をもつ生徒も多く、誇りのもてる活動となっている。現在、この「ういろう」は、商品名「はにいも ういろう」として発売に向けて準備がすすんでいる。



企業と連携した商品開発



提供されているスイーツの一例



地域イベントでの販売活動

(4) 社会的側面からみたミツバチプロジェクト

地域連携、大学との連携、他の高校との連携による学び合い、そして、消費者とのつながりを考えたい。

ア 高大連携プロジェクト

都市養蜂の活動にあたっては、平成22年からミツバチプロジェクトを実践している名古屋学院大学経済学部「地域活性化研究室」の協力を仰ぎ、高大連携プロジェクトをスタートさせることにした。このプロジェクトでは、講義や実習を通じて、大学のもつノウハウや知識を伝授していただきながら、本校周辺の環境を生かした活動を行っている。大学からは、都心での養蜂の心得や高校生によるビジネスモデル構築に向けてのマーケティング理論、蜂蜜パン作りの商品化などについて継続的に指導を受けている。

今後は、指導を受けた商品開発の手法を生かして、地域の店舗に商品開発を提案し、実際の商品化を目指していく。

イ 商店街連携プロジェクト

名古屋におけるミツバチを媒体とした地域のネットワークが着実に広がっており、名古屋学院大学を中心として、名古屋の四つの商店街（柳原商店街、笠寺観音商店街、桜山商店街、日比野商店街）が名古屋市商店街連携支援事業として合同勉強会や新たな商品開発採蜜イベントの開催な



イベントでの異なる世代の方々との交流

どを内容とする「なごや商店街ミツバチ連携プロジェクト」を実施している。本校も参加させていただき、異なる世代の方々との交流を通して、生徒は多くの学びの機会を得て着実に成長している。

ウ 木曾川高校×愛知商業高校 被災地応援プロジェクト

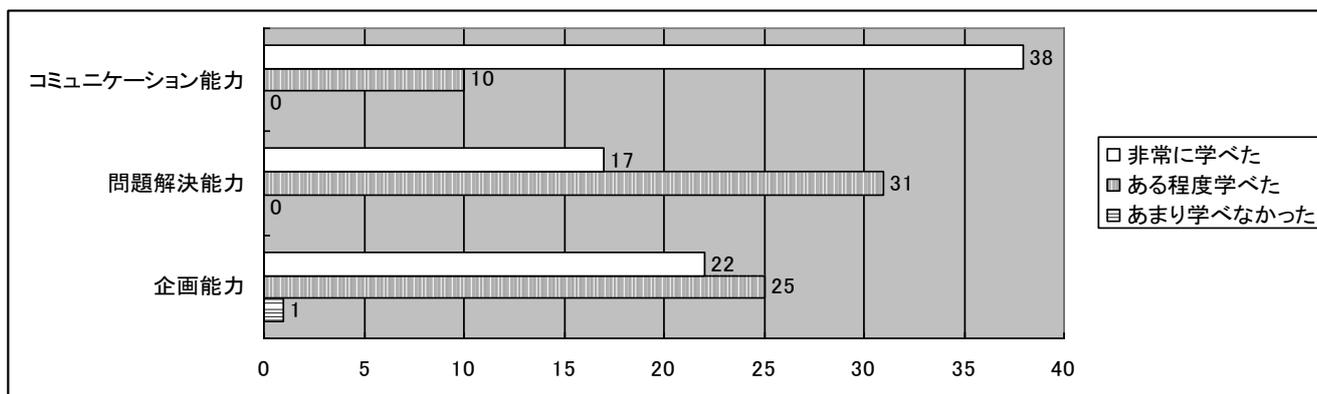
本校で採取した蜂蜜を活用し、木曾川高校の生徒がクリームパン「徳川はちみつ入りもっこう（木高パン）」の商品開発を行うといった他校との連携プロジェクトも推進している。木曾川高校の生徒は、びさいまつり（一宮市開催）、愛知商業の生徒は、布池教会バザー（名古屋市開催）とファームエイド銀座（東京・銀座開催）にて販売、収益金は全額、東日本大震災復興支援のために寄付した。E S Dの視点を取り入れた高校と高校の連携による商品開発は新たなつながりを生み、学びの場となっている。自分一人だけで考え、実践する成果は小さいが、皆で考え、実践することは大きな成果に変わっていく。そんな気づきのある取組に変わってきた。



東京・銀座ミツバチプロジェクトでの研究発表（ファームエイド銀座2012）

科目「課題研究・マーケティング研究」講座を選択した生徒に対するアンケート結果

質問1：コミュニケーション能力について 質問2：問題解決能力について
質問3：企画能力について



活動を終えた生徒の感想

- ・活動を通して、ミツバチが生態系維持のためにとっても重要な生き物であることを知った。
- ・ミツバチを通してたくさんの人たちと出会う事ができ、幅広い世代の人たちと関わっていく中で、コミュニケーションをとることが以前よりも得意になった。
- ・自分たちで提案し合い、議論を深めることは大変だったけど、社会人の方と話すことで勉強になった。
- ・地域の方々や大学生との出会いを通して、いろいろな考え方を知ることができ、人生の価値観が変わった。

また、生徒に対して行ったアンケート結果ではほかにも「責任感が生まれた」「地域に貢献できた」「地域の方々に認められた」という実感をもつ生徒も多く、E S Dの視点を取り入れたことで誇りのもてる活動となっていることがうかがえる。

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 実践の成果

- ・ミツバチプロジェクトを通して学ぶことで、地域の文化や経済、環境とのつながりについても関心をもつようになった。
- ・ミツバチプロジェクトを通して、地域の自然に触れ、地域の自然・環境について興味・関心を高めることができた。また、地域の自然・環境が豊かであることを知り、守っていききたいという意欲を高めることにつながった。
- ・地域の人々などとの触れ合いを通し、地域に暮らす人々への関心が高まるとともに、その人々の思いや願いに気付くようになった。
- ・ミツバチプロジェクトを通して、学校教育と地域の連携が深まった。
- ・地産地消の大切さを実感させることができた。
- ・ミツバチプロジェクトを通して、地域の特徴を理解し、環境を保全する態度を養った。



地域住民を対象としたはちみつ試食会

(2) 次年度への課題

- ・地域の人材、地域素材、地域連携などを見直すことで、教員のE S Dへの意識高揚を図りたい。
- ・保護者、地域の方々にE S Dの理念を広め、連携のさらなる具現化を図りたい。
- ・他の高校と連携してE S Dを推進していきたい。
- ・課題研究（総合的な学習の時間）だけでなく、さらなるE S Dの推進に向けて、どのような活動が必要か、全教育活動を見直した計画を立てること。
- ・E S Dの取組に地域人材に協力してもらおう体制ができてきたが、今後も活動の幅を広げるために新たな人材の発掘が課題である。
- ・E S Dカレンダーを基に、ミツバチプロジェクトを他教科との連携・協働した実践とすることで、学校全体の取組とする。

7 おわりに

今回の研究で、現在の取組にE S Dの視点を少しでも取り入れることで新しい展開ができることや学びが深まることが分かった。また、この研究を通して、E S Dの基本的な考え方として、物事を総合的に見るということであり、経済的な側面、社会的な側面、環境的な側面を総合的に見ていくことが重要であるということを知った。

今後は「持続可能な社会に貢献できる人材を育成する」意味においても学校全体でE S Dに取り組むことが大切であることを改めて実感している。

ミツバチプロジェクト（p. 97 資料1参照）がスタートして、2年目を迎えた。立ち上げ当初は、ミツバチを学校の屋上で飼育して安全面は大丈夫か、名古屋都心でどの程度、蜜が採れるかなど心配は尽きなかった。しかし今では、歴史と伝統を大切に守り続けてきたこの地域で蜂蜜を採り、その採れた蜂蜜で地域と連携し、この地域ならではのさまざまなしかけが可能だということを実体験することができた。さらに、このプロジェクトを通して持続可能なまちづくりへの新しいアプローチが少しずつ



東区役所での研究発表（歩こう！文化のみち
プレイベント・ガイドボランティア報告会）

つ見えてきている。今後もE S Dの視点を大切にしながら、ソーシャルビジネスを取り入れた高校生による新しいビジネスモデルの開発を継続的な活動として、他地域での活性化モデルとなるようにしていきたい。また、この取組を通じて、生徒を夢中にさせる舞台を設定することも教師の役目であり、経験豊かな地域の方々と教員が連携することで、生徒を成長させることができると考えている。以上のことを念頭に置きながら、今後も地域に根ざし、地域から信頼されるこの地域ならではのE S Dを展開していくとともに、ミツバチという一つの生物から環境教育、地域交流、マーケティングなど多分野にわたって学んでいきたい。

※参考文献

- ・「学校における持続可能な発展のための教育（E S D）に関する研究 最終報告書」国立教育政策研究所 2012.3
- ・「中部E S D拠点がめざす持続可能な地域づくり」 中部E S D拠点のアクションプラン

「なごや 文化のみち ミツバチプロジェクト」について

2011年6月より愛知商業高等学校校舎屋上において
ミツバチの飼育を開始しました！



「なごや 文化のみち ミツバチプロジェクト」とは

- ☆愛知商業マーケティング研究グループは、本校キャンパス周辺に広がる名古屋近代化の歴史遺産が数多く残るエリア「文化のみち」の地域活性化を目指して、みつばち育成の実証実験を開始しました。
- ☆“文化のみちで採れたはちみつは、文化のみちでしか味わえない”をコンセプトに「なごや 文化のみち ミツバチプロジェクト」を立ち上げ、この地域で採れた貴重なはちみつを活用した高校生による観光まちづくりの新しいアプローチを模索しています。
- ☆運営主体は、3年生の授業「課題研究・マーケティング研究」みつばちチームです。



「徳川はちみつ」で地域のお店と商品開発

採れたはちみつをこの地域の新たなブランドにしようと、学校の所在地(東区徳川)とこの地域が尾張藩徳川家にかかわりが深いことから歴史と文化の香りがする「徳川はちみつ」と名付けました。最近では、その貴重なはちみつを白壁ロールで有名な洋菓子店「パティスリー・リムーザン」や徳川園内にある「ガーデンレストラン徳川園」などに提供、私たちのアイデアが詰まったスイーツの商品化が実現しています。



愛商みつばち「とくがわハッチ」の蜜源



主な蜜源は、愛知商業キャンパス周辺に広がる徳川園や建中寺公園、名城公園そして町並み保存地区の庭園にある花々です。



社会貢献活動

近隣の保育園・幼稚園児をお迎えして、みつばち観察＆採蜜体験イベントを随時開催しています。



布池教会で開催された東日本大震災支援バザーや「歩こう！文化のみち」に出店、徳川はちみつを使った商品を販売するなど地域の活動にも積極的に参加しています。

問い合わせ先

〒461-0025 名古屋市東区徳川一丁目12番1号
 県立愛知商業高等学校 電話番号(052)935-3480【代表】
 課題研究「マーケティング研究」グループ(担当教諭 梶原英彦)